

小学校音楽の歌唱における正しい音をとることが困難な児童への指導方法 — 姿勢や発声に着目して —

石崎 友香
教科領域コース

1. はじめに

音楽科の指導内容は、文部科学省「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説音楽編（以下、「小学校学習指導要領」と記す）」に示す、A 表現と B 鑑賞の大きく 2 つの領域に分けられる。表現領域には、歌唱、器楽、音楽づくりの指導項目がある。歌唱に関しては、唱歌や童謡、わらべうたなどを子どもからお年寄りまで世代を超えて共有できるように歌唱共通教材として、授業で取り扱うべき 24 曲が設定されている。

歌唱の学習の際に児童の間で話題となるのが正しい音程で歌えているかどうか、いわゆる「音痴」なのかどうかである。本研究において正しい音程で歌えない児童を「正しい音をとることが困難な児童」と記すこととする。小学校では高学年に上がるにつれ、正しい音をとることが困難な児童は減少傾向にある¹⁾が 0 人になることはないのである。

しかしながら、『小学校学習指導要領』には正しい音をとることが困難な児童に対する具体的な手立てが記載されていない。そのため、これまでの経験や自身のノウハウを駆使して指導することが重要となる。「何が問題なのか分からないし、どのような指導をすれば改善するかも分からない」と悩む音楽教師もいるのではないだろうか。本研究ではそのような指導の困難さを解消し、児童が生涯にわたって歌唱に親しむために、小学校中学年・高学年を対象に、正しい音をとることを困難とする児童に対する適切な指導方法について検討していく。

2. 歌唱における正しい姿勢や発声と正しい音で歌えるようになるための手立ての考察

正しい姿勢や発声とは小学校学習指導要領でいうところの「自然で無理のない、響きのある歌い方で歌う」²⁾ ために必要な姿勢や発声のことである。本研究では、口を縦に開けて顎を引き背すじを伸ばした姿勢で裏声を使って歌うことを、自然で無理のない響きのある歌い方＝正しい姿勢や発声とする。

現在の小学校の歌唱教材は音域が高すぎる³⁾ ために、高音域に達する際でも地声（表声）で歌い続け、正しい音をとることを困難とする児童が多くなる傾向がある。⁴⁾ そのため裏声を使うことができれば音域が広がり容易く歌唱ができるのではないかと考える。また、音が視覚的に理解できないがために音階の意識ができない児童も存在すると考える。音階を可視化して意識できるハンドサインなどを取り入れながら実践を行う。

3. 実践報告とそこから考えられること

実践を行ったのは2学年、4学年、5学年である。小学校学習指導要領には、「(2) 音楽表現を工夫することや、音楽を味わって聴くことができるようにする。」と示しており、「音楽表現を工夫するとは、歌詞や器楽の学習においては、曲の特徴にふさわしい音楽表現を試しながら考え」⁵⁾ ることが求められている。このような音楽科の目標を踏まえて実践を行った。

2学年で扱った楽曲は坂田修氏の「ありがとうの花」である。児童らは綺麗でやさしい感謝を伝える曲と認識しており裏声で歌うべきと考えた。実際に歌ってみると地声で大きな発声をする児童が多く存在した。そのためミッキーマウスや狼の遠吠えの真似などを通して裏声の習得を図ったが、児童の多くは楽しく歌うことの意識が強く元気に歌う様子が見られた。ある男子児童Aくんは、歌声が低すぎるため正しい音で歌うことが難しいという課題があった。明るく歌ってみようと声をかけ表情の指示をしてもあまり変化を感じられなかった。他にも裏声をどのように出すのか理解が難しそうな児童も存在した。小学2年生が裏声を使って正しい音をとるための指導を本格的に行うには発達段階として早いと感じた。

4学年で扱った楽曲は杉本竜一氏の「Believe」である。前述したキャラクターや狼の遠吠えの真似を通して多くの児童が裏声を習得することができ、正しい音で美しく響く歌い方ができた。それでも歌うことに対して恥じらいを感じ始める発達段階なのか、歌唱に自身がないのか、ある女子児童Cさんは歌声が消極的な声量のため裏声で安定した音が出せない児童であった。裏声を使うことで正しい音を取りやすくなるが、安定した音にするためには声を支えるための息が必要である可能性がある。小学4年生は音階の高低差や音程の正誤を意識し始め、2部合唱などの高度な歌唱技術が必要となってくる段階である。正しい音をとることができれば合唱をより楽しく感じられ、音楽の面白さを実感してもらえるのではないか。そのような点からも正しい音をとるための本格的な指導ができればよい発達段階であると考ええる。

5学年で扱った楽曲は古宮真美子氏の「Can do 君が輝くとき」である。前述したキャラクターや狼の遠吠えの真似を通して容易に裏声を習得することができたが、2部合唱で互いの旋律に負けないように歌おうと声を荒げることで発声が不安定になり正しい音で歌えない児童が存在した。さらに変声期の児童は、裏声で歌うことで自分の出している声がわからなくなってしまう場合があった。ある男子児童Dくんは、裏声を使わずに歌える音域では正しい音を容易にとることができるのだが、裏声を必要とする1点口の音からの高音域では正しい音がとりづらくなるのである。けれども、このような一部児童を除いたほとんどの児童は、裏声で歌うことで正しい音をとることができるようになったのである。特に高音域における成果が大いにあった。5学年は裏声の習得が容易にできるため、裏声による正しい音をとるための指導の有用性が高い発達段階であると考ええる。

歌唱においては、安定した裏声で歌う技術の定着を図ることで正しい音程で歌える児童数が増加するのではないかと考える。そのためにはどのような声かけで歌唱イメージをもてるようにするか、持続して裏声を出せるようにするためにどのような指導を行うかが重要となってくる。

4. 教育現場における指導面での留意点

留意点の1つ目として児童の実態に適した楽曲の選択が挙げられる。幼児向けの教材や教科書歌唱教材の最高音の平均は2点嬰ハ、最低音の平均は1点嬰ハである。⁶⁾ 児童からすれば、地声（表声）のみで歌えなくもない音域であるが、高音域を正しい音で歌える児童は少ないのである。裏声

を習得すればよいかもしれないが、裏声を出すと自分の声が分からなくなりうまく歌えなくなってしまう児童も存在する。正しい音で歌えるように指導することは音楽科教師の重要な役割であるが、そもそも児童の実態に合わせた楽曲を選択することも重要であることを今一度留意したい。

留意点の2つ目として大きい声で歌うことを意識した指導が挙げられる。ただ大きな声を出すのではなく何のために「大きい声」で歌うように指示しているのか意図を明確にする必要があると感じる。例えば声量が足りないと感じたからとりあえず大きな声で歌ってほしいというような意図で大きな声でと指示したとする。児童は曲調にあった声の大きさでもなく、自然で無理のない歌い方でもない、とにかく大きな声で歌うのである。それでは音楽科教育の目的も果たせず、自分たちの声を落ち着いて聴くこともできないだろう。さらに裏声を習得しても大きな声で無理に歌っては地声（表声）が見え隠れしてしまうのである。そうすると正しい音で歌えていたものが不安定な音になってしまう。実践を通して大きい声を意識した歌唱ではなく、他の人の声を聴きながら裏声で美しく歌おうとした歌唱の方が正しい音をとれる割合が多かった。とりあえず大きな声を出してみるという指示についても留意する必要があると考える。

留意点の3つ目として歌唱の声が小さいために全体での練習では正しい音がとれているかどうか発見しづらい児童が存在することが挙げられる。通常の音楽科の授業では、1人1人に時間をとって丁寧に音の確認をすることが困難である。そのような中で埋もれてしまいがちな児童をどのように発見し指導するかについては大きな課題であるといえるだろう。

5. まとめ

実践を通して正しい音をとることが困難な児童に対する指導について述べてきた。歌う際の姿勢や呼吸法は様々な先行研究をもとに児童にどのような歌い方がよいか問いながら試してきた。前述した正しい姿勢や発声は重要であり、これらに加えて裏声を習得することが正しい音をとるための1つの手段であると分かった。しかしながら、歌うことと姿勢を保つことの2つを同時に意識することの難しい児童や、うまく息が吸えずに十分な発声が困難な児童、裏声の習得が難しい児童や裏声で歌うと自分の音が分からなくなってしまう児童も存在していた。さらに男子児童については高学年あたりから始まる変声期を考慮する必要もある。正しい音で歌えることは音楽科の歌唱の技能面では重要なことであるが、1人1人に個人差があることを踏まえることを留意すべきであると強く感じた。本来、本研究は将来の音楽嫌いを少しでも減少させるために小学校段階でできることはなにかという点から発想を得たものである。正しい音で歌えることが楽しい音楽とは限らないこと、楽しさを見いだせるように教材を吟味することが重要である。

注

- 1) 村尾忠廣 「音楽指導ハンドブック [調子外れ] を治す」(2001) 音楽之友社 p. 51
- 2) 小学校学習指導要領(平成29年告示) 解説音楽編 文部科学省 p. 22
- 3) 注1) p. 5
- 4) 注1) p. 63, 66
- 5) 注2) p. 13

6) 注 1) p64

参考資料

小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説音楽編 文部科学省

村尾忠廣 音楽指導ハンドブック「[調子外れ]を治す」（2001）音楽之友社